韓国仏教の歴史と現況

延 基榮（よん きよん）（訳・尹 龍澤（いん りゅうたく））

一、序論

韓国仏教は韓国文化の根元を形成している。仏教文化財が韓国全体の文化財の七〇％以上を占めている。韓国文化のアイデンティティーに言及するとき、仏教がまず初めに出てくるのは当然である。それだけ韓国人の思想と歴史、文学と芸術の中には仏教が最も根を深く下ろしているのである。

では、韓国仏教とは何か？　これに対する解答は、まずインド、中国、日本などの仏教と区別される「韓国化された仏教（Koreanized Buddhism）」から探し求めることができる。[1] すなわち、韓国仏教とは、インドで発生した仏教の普遍性を維持しながらも、韓国人の歴史と人生の中で特殊性を持って新しく形成された仏教をいう。

本稿では、韓国仏教の歴史を簡単に叙述した後に、韓国仏教の特徴と現況について考察することにする。特に韓国仏教の現況を宗教団体、布教、教育、文化、社会の各分野別に明らかにしてみようと思う。

二、歴史

（1）仏教文化の受容

韓国仏教は、三国時代にインドから中国を経て伝来した。遠くインドで発生した仏教は、中国大陸に入って中国の独特の文化と接触・融合しながら、中国的な仏教文化が作られた。このような中国の仏教文化が韓国に入ることになったのである。

三国の中で高句麗が百済、新羅よりも若干先に仏教を受け入れた。高句麗は、中国と国境を接していて、時には戦争を繰り広げながらも絶え間なく交流を継続した。その当時、前秦の皇帝・符堅は、中国を統一するために高句麗と友好を結ぼうと努力した。符堅は、仏教を積極的に推奨して、西暦三七二年に高句麗に使節を派遣して、僧順道に仏像と経典を送って仏教を伝播した。その二年後には東晋から僧阿道が来て、高句麗王室では寺を建てるようになった。肖門寺と伊弗蘭寺を建設して、順道と阿道が居住しながら仏教を伝播できるようにした。[2] このように高句麗で受け入れた仏教文化は、主に前秦をはじめとした、北方の中国仏教であった。

このような仏教伝来説に対して、他の学説も存する。すなわち、その時期よりも先んじた時期にすでに高句麗に仏教が伝播されていたとする学説が有力に主張されている。これは、国家公認でない民間次元の信仰形態として存在した可能性があると見るのである。[3] 東晋の高僧支遁道林（西暦三一四―三六六年）が、高句麗の高僧（名前は明らかではない）に文を送ったという記録がある。[4]

百済は、海を隔てた中国から仏教文化を受け入れた。百済には西暦三八四年（第一五代枕流王一年）にインドの僧・摩羅難陀が東晋から海を渡って入ってきて、仏教を伝えた。このとき、枕流王は摩羅難陀を大いに歓迎し、宮中に迎えて敬ったという。[5] 百済がこのように一人で海を渡ってきた外国の僧を宮廷で歓待して敬ったことを見るとき、すでに百済には仏教が伝播していて、ある程度理解するだけの契機があったと推し量ることができる。摩羅難陀が来た翌年には、百済に寺を建てて一〇人の僧侶を輩出したという。

新羅は、地理的情況のゆえに、国際情勢と新しい文化の動向に疎かったために、高句麗から伝えられた仏教文化を無条件に受け入れようとはしなかった。そこで、高句麗の僧正方と滅垢珮が仏教を伝えようと新羅に入って来たが、犠牲になった。その後、墨胡子と阿道などの伝導僧たちも隠密裏に伝道を行った。結局、西暦五二七年（法興王一四年）に至って、王の父方の従兄弟の息子であ

り、臣下であった異次頓の殉教をきっかけとして、仏教を国家的に公認することになった。これを契機に新羅は仏教文化を大きく発展させ、民族文化の主軸となり、また民族統一の思想的基盤となった。

(2) 仏教文化の振興

1 三国時代

高句麗では第一九代、広開土王が西暦三九二年に平壌に九つの寺刹を建てて、汎国家的に仏教文化を発展させた。しかし、第二七代栄留王（西暦六一八―六四二年）のときに入ってきた道教の影響で次第に衰退し始めた。宝蔵王二年（西暦六四三年）には実権者である淵蓋蘇文の意に従い、当時、唐の国から道教を受け入れて優遇し、仏教を冷遇した。寺院を没収して、道教の寺院である道館とし、道士を優待して僧侶を格下げした。その当時、高僧普徳は、宝蔵王に「国家の思想であり、文化の主軸となっている仏教をにわかに抑圧すれば国が危殆に瀕するであろう」と、幾度も建議したが王は聞かなかった。結局、西暦六五〇年、普徳は高句麗を捨てて完山州（今の全州）に行き、その後、西暦六六八年（宝蔵王二七年）に高句麗は滅亡してしまった。

百済でも仏教が入ってきた後、多くの寺を建てて、国民に「仏法を信じて福を求めよ」との令を下した。二六代聖王四年（西暦五二六年）には、高僧謙益がインド留学を終えて持ち帰った仏教経典を翻訳した。百済は中国から仏教を受容したが、直接インドからも仏教文化を輸入しようと努力したようである。また、聖王三〇年（西暦五五二年）には日本に仏教を伝えた。特に二九代法王（西暦五九九年）と三〇代武王（西暦六〇〇―六四一年）の時代に仏教文化が繁栄した。

新羅において仏教文化が発展し始めたのは、二四代真興王（西暦五四〇―五七六年）の時からである。真興王五年（西暦五四四年）には興輪寺が完成したし、同一二年には高句麗から帰化した高僧恵亮を僧統（国統）として教団を統率させた。恵亮は百高座法会と八関会などの護国的な仏教行事を始めて、仏教文化の振興に大きく貢献した。[6] 真興王の仏教文化振興策は、果して、三国統一の原動力になった。その後、歴代の新羅王も彼の意思を

受け継いで仏教文化を振興させるために多くの努力を傾け、多くの僧侶を輩出して仏教文化財を作り上げた。

2 統一新羅時代

三国のうちで最も立地的条件が脆弱であった新羅は、仏教を国教として、仏教文化を振興させた真興王の時から最も強大な国になった。ついに二九代太宗武烈王の時には百済を、三〇代文武王の時には高句麗を征服して、民族統一を成し遂げたのである。

統一新羅時代に民族的な仏教文化の花を咲かせる主軸になった高僧としては、元暁（六一七―六八六）と義湘（六二〇―六八九）、そして円光（五三二―六三〇）と慈蔵（六三六年帰国）を挙げることができる。民族統一という大業の偉大な精神的指導者であった。その後多くの高僧が輩出され、仏教文化をより一層光り輝かした。その代表的な高僧には、憬興、太賢、円測、明朗、真表などがいる。統一全盛期の新羅には優れた仏教芸術家と技術者たちも多く輩出され、仏教文化を燦爛と輝かせた。慶州の仏国寺と石窟庵などの立派な仏教文化財がたくさん作られた。

三〇代文武王が統一を成し遂げた後から三五代景徳王までは国家的にも全盛期であり、仏教文化の黄金時代であった。特に景徳王の時代は、仏教文化の全盛期ということができる。三六代恵恭王の時代に入って政治が混乱するに従い、仏教も次第に沈滞するようになった。意識の高い仏教指導者たちは、混乱を避けて山の中に入って隠遁生活をしたり海外に出かけていった。このようなときに、中国から禅宗が入って来始めた。教学中心だった新羅仏教に禅法が占める比重が大きくなるに従い、沈滞しきっていた教団に新しい風を起こすようになった。しかし、禅風もその当時の混乱していた社会を救済するのには限界があり、結局、高麗時代へと移ることになった。

3 高麗時代

統一新羅の末期の混乱期に乗じて、後百済（西暦八九二―九三六年）と泰封（西暦九〇一―九一八年）が建国され、再び三国が鼎立することになった。このような後三国を再び統一した人が、高麗の太祖王建である。太祖王健（西暦八七七―九四三年）は、もとは泰封国の弓裔王の部下であったが、西暦九一八年に弓裔を追い出して国